

# 旅行産業の社会的な役割とミッションは如何にあるべきか

株式会社ユナイテッドツアーズ

末次 博文

## はじめに

今回旅行産業経営塾に入塾し、改めて旅行産業が社会に貢献する役割を考えることができた。旅行産業とは、お客様に心の豊かさ、達成感、明日への糧を提供する社会的な役割がある重要な仕事である。単なるチケット手配屋ではなく、チケット1枚を販売する上においてもホスピタリティーに対価をいただいているということを忘れてはいけない。これが旅行産業である。

現在私の所属部署は、台湾旅行事業部という日本で唯一旅行会社で残った台湾旅行専門部署である。以前は一つの中国政策による国交の問題で中国を扱う旅行会社は、台湾を扱えないという理由から多くの旅行会社に台湾専門の子会社が存在していた。航空会社も日本航空の子会社で、日本アジア航空、全日空も台湾の為に発足したのではないが、子会社のエアーニッポンが先にあった為、そのまま台湾に就航させた経緯がある。2004年頃から各旅行会社は、両国の緩和政策により直接販売ができる事となり、その頃から各台湾専門の子会社は、本体に吸収され始めた。2007年には航空便の直接運行も認められ、2008年には日本アジア航空も日本航空に吸収された。エアーニッポンはもともと国内線運航会社であったが、こちらは経営統合により2012年に全日空に吸収された。その時代の流れの中で、台湾旅行を販売する為に立ち上げられた弊社が、いまだに存続しているのは何故か。これが旅行産業経営塾でも追い求めていた、ニッチなマーケットでも一社独占すれば十分に生き残れるメリットとなるからであろうか。いやそうではない、台湾販売の門戸は広げられた為ニッチなマーケットではないのである。

旅行というのは平和産業であり、天災地変、テロ、戦乱、暴動、伝染病、政治的要因で直ぐに商売に影響を及ぼすものである。その中において、日本の事を多く理解してくれている台湾との架け橋となるべく社会的役割と弊社の存在意義を考える。

## 台湾人は本当に親日家なのだろうか

いまでは、台湾は親日家が多いと言われているが、本当にそうなのであろうか。また、過去はどうであったのだろうか。

1945(昭和20)年までに日本の中等教育以上を受けた台湾人は、ほとんどが日本語を覚えていて、NHKの衛星放送を楽しみ、日本から雑誌や書籍を取り寄せるだけの語学力を持っている。(略)「日本へ行こうもんなら、自分が台湾人であることを忘れてのっけから日本人になりきってしまう。これって何だろう？自分でもフシギですよ」こうした人々を台湾では、「日本語族」とも「多桑」(トオサン)とも呼んでいる。「多桑」は、日本語の「父さん」の発音に漢字をあてはめた台湾語だ。今では「多桑」という台湾語は、日本時代の教育に影響を受け今も日本語をしゃべる年配者の代名詞になった。

また多桑はこうも語る、「日本は、台湾における元日本人のことをすっかり忘れておりますね。私は大恩のある日本を決して忘れません。それが国を愛する心なんです。日本は台湾を今日のごとく大きく育ててくれた。ですから最後まで恩返しをしたいのです。感謝報恩は道徳の基本、国を愛する心でもあります」『トオサンの桜(平野久美子著)』

しかし実はどの文献を参考にしても多桑の多くは、これほど日本を愛しているのに日本は敗戦後、台湾人をあっさり見捨てた。日本人として教育され生きてきた、日本の為にも命も捧げ自分は日本人であると思っていたのに見捨てられたと恨みに思っていたのである。これには正直驚かされた。私は、台湾人の多くは親日家だと聞かされ、実体験からも感じていたからである。しかし、それは日本を愛するが故の叶わぬ恋の歯がゆさからであったと知った。ただ、統治時代の教育だけで既に67年以上にもなる現在まで、当然この間反日教育があったにも関わらず、本当に日本を愛し続けられるものなのか。また、多桑世代の次の世代にも反日教育があったはずであるが、何故多くが親日的なのか。それにはその多桑世代の継承があった。

## 何故台湾人の多くは親日家なのか

一昨年の東日本大震災の際、被災後3日目に台湾全土の消防士で構成された救援隊を28名も派遣してくれ、同時に物資も届いた。また、250億円を超える世界一の義援金を寄付していただき、いまだに増え続けているのである。何故台湾にはこれだけの親日家がいるのか。その理由を聞くと、台湾の921大震災の際に日本は素早い救援隊の派遣、多額の義援金を送ってくれたのでそのお返しであると言う。その恩を忘れない心は、どこことなく日本人に似ていると感じる。本当にそれだけであろうか。それでは、その1999年より前にはそれほど親日家は存在しなかったであろうか。何故台湾にはこれだけの親日家がいるのかを更に問う。歴代の日本人がそうしてきたように心の底から相手の事を気遣い、感謝の気持ちを持ち、恩を忘れないと台湾人は言う。今の台湾の方々、日本人がしてきたことと同じことを返してくれているのである。今台湾の方々と接し感じることは、日本人より日本人らしい多桑世代の方々に会えることが多いということである。ただ、台湾人の中にも反日感情を持った人は当然いるであろう。同じ日本人同士や、家族でも恨み恨まれ傷つけ合うのだから、感情を持った人間同士、更に他国民同士なわけで、いて当然なのである。我々は、メディア、学校教育、身近においては、家族、友人でさえも教育や意見に左右される影響が大小は別としてあると言う事を知っておかなければならない。

尖閣問題で中国大陸側があれだけ反日感情を表に出している中、当然領土に関しては台湾側もお互いに言いたい事もあるであろうが、日本人の気持ちを考慮しながら、「政治の事は政治家が解決する問題で、一般市民の友好関係にひびは入らない(尖閣問題勃発直後に台湾政府が発表)」と、問題発生中においても日本人に対し親しく接してくれるところは、どこか日本人魂が宿っていると感じた。但し、間違えてはいけない事は、尖閣問題の最中私は中国の北京に行ってみた。報道されていたようなことには少なくとも出会うこと無く、街並みもおだやかで北京空港には日本語で「ようこそいらっしゃいませ」の看板(もちろん各国語のものもある)が残ったままで、ところどころ会話をしている空港職員や、街中の各お店の店員、ホテルスタッフは皆親切であった。その中でも、もちろんタクシーの日本人乗車拒否、ツアーの受け入れ拒否、マラソンエントリー拒否、暴動等身近に体験した人、報道で取り上げられている事があるのも事実であるが、それが全土に渡る全てでは無い。報道の全てを信じてはいけないと感じた瞬間であった。ただ、ホテルで見た中国国営テレビの中国中央放送(CCTV)では、これはいつ実施したものでしょうかと思うほど私自身も見たこ

とのない、日本の自衛隊のミサイル発射や戦闘機の離発着、戦車の砲撃等の訓練風景を流し続けていた。また、日本では配備の件でもめている為、国内では繰り返し離発着風景が報道されていたオスプレイまでが最新兵器の扱いで繰り返し報道されていた。日本が戦争を仕掛けようとしている。対処する準備をしなければと国民をあおる内容のニュースを数十分に渡りやっていた。これなら報道に洗脳される国民が多くいても仕方がないと感じた。

日本で働く私の周りの中国人は皆一生懸命、まじめに謙虚に働いているのに、目には目をとばかりに日本人に暴言を吐かれているあるお店の店員を見た時は、こちらが申し訳ない気持ちになり、謝ってしまう。人の感情は、メディア、政治家も含め少数派でも声高な方に流される傾向がある。日本と台湾を股に掛けて仕事をする中国本土の知人は、日本人と台湾人の性格は似ている、真面目さ、優しさ、謙虚さがある。中国の国民も見習ってほしいと言う。中国人でありながら、自国民を不安視し恐れている人もいる。メディアでみる反日＝愛国のような人ばかりでは無いのである。

現在の台湾では、「哈日族」(哈＝好きで好きでたまらないという意味)という日本を好きで好きでたまらない人たちという言葉までできたほどである。

「日本人が台湾に伝えた有形、無形の財産の中に“水に流す心”、許す心がある。この日本精神のおかげで台湾人は心が広がった。」水に流す心は単に過去を忘れることではない。憎むことや恨むことを忘れ、相手を許して認める。おのれの気持ちを浄化することだ。そんな高度な技が、戦前の日本人から伝わったと、トオサンは言っている。『トオサンの桜(平野久美子著)』

実は、この日本人から受け継いだ元来の日本の大和魂が、いまだ多桑世代の心の奥底には宿っている為、裏切られても見捨てられても日本を愛し続けてくれているのである。時代として当然反日教育があったが、この多桑達が事実を正確に日本人の貢献を次の世代へと伝えてきてくれたお陰である。

台湾人には、今の日本人には無くなってしまった元来の日本人の心が今でも宿っているのであろう。そういう方々がいまだに多くいるからこそ、日本人も受け入れやすく現在の日台関係になっていると感じる。台湾の方々全員が日本好きだとは言わないが、こういう方々が多くいる国が台湾なのである。

日本統治時代、台湾で活躍したとされる浜野弥四郎でさえも、一人で貢献した訳では無かった。バルトンという素晴らしい恩師がいたのである。浜野弥四郎とバルトンとは、衛生工学の技術者で日本統治時代に台湾の島の衛生状態を見て、このままではあらゆる疫病に侵されると、上・下水道を整備したのである。衛生工事調査をしていた浜野弥四郎が、民生局技師として任官されたある日、台湾で面会していた日本人に対し不満を持っていたところ恩師バルトンが諭す事があった。

「弥四郎、浮かない顔をしているが、任官の内定が嫌なのかね。」「いえ、そんなことはありません。」(略)「ただ、この三週間あまりの間に台湾であった連中には好感をもてませんでした。役人は権威主義で自分のことしか考えていない。軍人は威張っており、何かといえはすぐに武力に訴える。民間人は、金、金の守銭奴のような連中。(略)こんな連中と仕事ができるだろうか。(略)」「気持ちはわかるが、間違っている。それでは私は何のためにここで仕事をしているのかね。スコットランド人であるこの私は、君の言う最も愚劣な日本人に混じって仕事をしているのだ。それは何のためなのだろうか。」(略)「衛生工学は人間のためのものだ。日本人のためだけ、清国人のためだけにあるのではない。どこに住んでいても人間が健康に暮らせるようにする、それが衛生工学の基本ではないか。』『日本人、台湾を拓く。』より「浜野弥四郎(稲場紀久雄

著)」

どこかで聞き覚えのある内容である。まるでips細胞研究の山中教授の発想と同じではないか。浜野弥四郎だけでは無い。日本統治時代、台湾総督であった児玉源太郎のもと台湾を近代化に導くため統治の方法に手腕を振るい、鉄道を充実させた後藤新平、そのもと日本人なら必ず名前を知っている製糖業を飛躍的に発展させた新渡戸稲造と鳥居信平、不毛の地と呼ばれていた嘉南平原を嘉南大圳と呼ばれる灌漑用水路と烏山頭ダムを建設し、いまだに台湾南部の生活を豊かにしている、日本人には知名度が低いが台湾人には台湾で一番有名な日本人と言われている八田與一等まだまだいるが、生きる為に必要なインフラの多くを日本人によって築き上げられたお陰で、今の豊かな台湾の生活があると台湾人の多くが日本人に感謝してくれている。当然戦後の反日教育では、日本人の功績は全く伝えられなかったが、一緒に生活をしてきた多桑達がありのままを語り継いでくれたのである。数多くの先人の日本人達が台湾に貢献してきてくださったお陰で、反日感情が少なくは無かった台湾の方々に功績が歪曲されずに広まり、今の親日家が多い国となったのである。

## 企業として、また個人としての役割は何か

今弊社では、例え儲からない仕事でも、日本と台湾の架け橋になると考えられるものは積極的に行っている。日本人がもっと台湾を、台湾人がもっと日本を好きになってくれたらという思いからである。私を台湾好きにさせたエピソードがある。今から22年前のことである。当時は台湾旅行といえば今のように台北滞在だけのツアーではなく、台北・花蓮、台北・高雄・花蓮、台湾一周のツアーが全体の3割強(弊社扱い比)にも及んでいた。今日台北以外ほとんど行くことが無くなったのは、旅行会社に大きな責任がある。台湾各地の魅力をマーケットに伝えなくなった為である。台湾一周の添乗に行った時のことである、村永さんというご年配のご夫婦が参加されていた。そのご夫婦は私と会うなり開口一番、今回のツアーに参加した目的を伝えられた。この方は戦争体験者で、戦時中台湾の子供たちからの兵隊へ向けた「慰問袋」のやり取り(文通)をしていたが、戦況が悪化しお互いの消息も途絶えたとの事であった。その時に文通していた「藩石鉗(はんせつかん)」という人に会いたい。今はどこにいるのか、生きているのかも分からない。今までご自身で台湾の政府に手紙を書いたり、日本側から捜してもらおうとあらゆる機関に依頼したが、その雲をつかむような話を誰も相手にしてくれなかったという。74歳で最後のチャンスと台湾に行けば何らかの手掛かりを見付けられるのではと思ひ、ツアーにご参加されたとの事であった。

当時23歳の私には、そんな大それたことを言われても何をして良いか全く思いつかず、ガイドの呉椅萬(ごいまん)氏に相談した。呉氏も困り果てその日の夜、学校の先生をしている奥様に電話で相談をした。奥様は、名前が分かるなら方法があるかもしれない、生きていて世帯主なら電話帳で捜せると言うのだ。当時の台湾の電話帳は一冊に全土の方々の登録がされていた(現在そのような電話帳は存在していない)のである。そこで我々は日中添乗業務がある為、呉氏は奥様に名前を伝え捜索が始まった。毎晩途中経過の報告をもらうようにしていたが、1日目、2日目と全く成果なしであった。その頃には参加者全員にも知らせており、毎晩の返事を皆心待ちにしていた。3日目の晩の事である、奥様から同姓同名が6名いたとの連絡が入った。今日は夜遅いので、明日全ての家に連絡してみるとの事であった。ツアー参加者には糠喜びさせてはいけないと、この日も見つからないとの報告をした。4日目の夕方早い時間に奥様から6名の中に当時の事を話すと、当時12歳の少年であったので、うっすらであるが記憶がありそれは多分私の事

ですと言う人物をようやく見つけたとの連絡であった。私はいてもたってもおられず、夕食の場で全員に発表した。お客様全員が自分達の事のように大喜びとなり、大宴会が始まった。しかも、明日列車で花蓮から台北に一行は移動するのだが、台北駅まで藩氏が迎えに来てくれるとのこの上ない朗報まで飛び込んできた。夜、村永さんご夫婦は、嬉しくて眠れませんと私を部屋に招き入れてくれ、日本から持ってきたお酒で深夜まで乾杯を繰り返して語り合った。その時の子供が遠足に行く前夜に嬉しくて眠れないかの如く、キラキラした人生の大先輩の目を私は今でも忘れない。

遂に当日が来た。午後早い時間帯に到着した特急列車を降り改札を出ると、呉氏の奥様が一人の男性と立っていた。村永氏は、恐る恐る「藩石鉗さんですか？」と名前を確認し、当時の記憶の全てを話し出すと、お互いに覚えている点が多数あり、間違いないと泣きながら抱き合った。その光景を見たツアー客全員が号泣した。もちろん我々も。これこそ正に奇跡である。万一相手のお名前が陳氏や林氏等の台湾で多いと言われている名字なら不明のままであったかもしれない。

村永氏が帰国後直ぐに、宮崎日日新聞に「ガイドさんの協力に頭下がる」というタイトルで投稿した記事が掲載された。その後村永さんご夫婦はご高齢の為、1回だけ台湾に行かれたが、会っていたのは藩氏だけではなく、呉椅萬氏のご家族ともであった。もう高齢で飛行機に乗れないと聞くと、今度は呉夫婦が宮崎に通い、藩氏以上に仲の良い友人となっていた。呉椅萬氏は、私のような若僧にさえいつも心配して手紙を頻繁に送ってきてくれた。いつも気遣ってくれた。添乗で台湾に行った時はいつも会いに来てくれた。最後までプライベートでも家族ぐるみのお付き合いができた心と心が絆で結ばれた恩師であり朋友であった。

## ガイドさんの 協力に頭下がる

農業 村永 強 74

昭和十五年、私は中支を  
転戦中、慰問袋をもらった。  
送り主は台湾台北市の藩石  
鉗という十二歳の男子小学  
生だった。「兵隊さんへ」  
との書き出しで、戦線の私  
たちへの励ましの言葉が書  
いてあった。さっそく返信  
を出したのが縁で数回文通  
した。その後、戦況が悪化

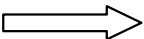
してお互いの消息も途絶え  
た。

今回、台湾旅行をするこ  
とになり、藩君に会いたい  
と思ったが、戦争のどさく  
さで住所も分からない。そ  
こでガイド役の呉椅萬さん  
に頼んだところ、旅先から  
奥さんと電話連絡、電話帳  
から始まりついに捜し出し  
てもらった。

五十年ぶりに会えた藩さ  
んは六十四歳。現在建設会  
社の重役として活躍中で、  
立派に成功されている姿に  
感動した。それにしても労  
を惜しまず人捜しに協力し  
てくれたガイドの呉さんに  
は頭が下がった。(都城市)

村永強(つとむ)氏投稿記事(宮崎日日新聞 1991年6月掲載)

## さいごに

参考文献の台湾人が書く本の多くには、全て日本人に心の底から恩を感じてくれており、日本人は素晴らしいと書かれている。また日本人が書く本の多くには、今の日本人以上に日本人らしさを多桑世代の台湾人は持っていると記されている。敗戦後、反日教育が始まり日本の全てを廃棄させられた中、また、日本の事を良く言うだけで処罰された時代の中、歴代の日本人の功績を記す像、記念碑等を恩返しの気持ちから命がけで守り続けてくれた台湾人への感謝の念を表している。やはりお互いに自分達は謙虚に、相手の事を尊重し理解し合っている同じ国民であった事実の表れであろう。これが今の崩してはならない日台関係なのである。台湾人に感謝されている先人の日本人でさえも、浜野弥四郎とバルトンのように更に他の国の方々に影響や恩を受け継承してきた人もいないのだろうか。他人の受け売りではあるが、地球上で心を持った生物は少ない。その中で一番大きな存在は人間である。自然の中で生きていながら自然を大量に破壊するのも人間である。今の人間はどうなっているのだろうか。人間は、心と心が繋がって一つになるからこそ地球上に存在を許されているのだ。まさに HEART to HEART、HEART to HEART、地球上の人間全てが心と心をつなげるにより HEART HEART HEART HEART・・・  H EARTH EARTH EARTH EARTH・・・となり地球上に住む事を許されているのである。

私は、政治的解決が難しい事でも、民間企業や個人が中心となって絆を生み出し進展させてゆくことができるかと確信している。その社会的役割を果たす企業となり、私も多桑達がそうしてきてくれたように台湾を愛する「哈台族」となり、もちろん日本を愛し誇りに思い、真実を語り続け日台の懸け橋になる人間になりたいと願う。村永氏の目をキラキラさせた時の初心を忘れず、常に最高のホスピタリティを持ってお客様と接することで、人の心を豊かにし明日への生きる糧を提供できる素敵な業界にいる事を私は誇りに思う。そのような財産をより多くの日本人や世界各国の人に知ってもらう為、多桑達の話しを聞く機会や、伝える場を提供しうまく融合したツアーを造成する。また、そのような先人として台湾に貢献してきた日本人をまとめた書籍を発刊する。今、多桑が徐々に少なくなっていく中、弊社の役割は多桑の継承なのかもしれない。

### 参考文献

- 『トオサンの桜』 平野久美子著（小学館）
- 『日本人、台湾を拓く。』より「浜野弥四郎」 稲場紀久雄著（まどか出版）
- 『日本人はとても素敵だった』 楊素秋著（桜の花出版）
- 『台湾は日本人がつくった』 黄文雄著（徳間書店）
- 『宮崎日日新聞』

### 参考 WEB サイト

- 『台北駐日経済文化代表処ホームページ』 <http://www.roc-taiwan.org/JP/mp.asp?mp=202>
- 『台湾観光協会ホームページ』 <http://www.go-taiwan.net/>
- 『公益財団法人交流協会ホームページ』 [http://www.koryu.or.jp/ez3\\_contents.nsf/Top](http://www.koryu.or.jp/ez3_contents.nsf/Top)
- 『全日本空輸株式会社ホームページ』 <http://www.ana.co.jp/ir/>
- 『日本航空株式会社ホームページ』 <http://press.jal.co.jp/ja/>